

令和 8 年度 学校教育審議会（第 1 回） 議事録

1 日 時 令和 8 年 5 月 2 9 日（金）午後 1 時 3 0 分～午後 3 時 3 0 分

2 場 所 自治会館 3 階 大会議室

3 出席者数 1 5 名

4 出席者

伊藤 佳枝 委員	今泉 仁寿 委員	小沢 喜仁 委員
小林 文紀 委員	佐川 綾子 委員	佐藤 勇樹 委員
鈴木 陽子 委員	鈴木 綾 委員	丹野 純一 委員
寺木 誠伸 委員	中野 寛子 委員	永山眞由美 委員
沼田 鮎美 委員	村尾 碧 委員	森 涼 委員

5 資 料

資料は下記(1)～(3)のとおり。

(1) 資料 1 ① 次第

② 委員名簿

③ 福島県学校教育審議会条例

④ 福島県学校教育審議会運営要綱

⑤ 福島県学校教育審議会傍聴要領

⑥ 用語解説

(2) 資料 2 ① 諮問の趣旨と背景

② 国の動向

③ 今後の予定

(3) 地域や社会の変化を踏まえた県立高等学校の在り方について（諮問）

6 開 会

委員 1 5 名の出席を得て、午後 1 時 3 0 分に開会。

7 辞令交付

教育長から出席委員一人一人に辞令が手渡された。

8 教育長あいさつ

9 職員紹介

事務局から、教育長、政策監、教育次長、庁参事、各課室長、教育センター及び特別支援教育センター両所長の職と氏名の紹介があった。

10 会長・副会長選出

委員から推薦があり、会長に小沢委員、副会長に小林委員が選出された。

11 会長・副会長あいさつ

〔会長〕

10 年前ほどになるが、前回の学校教育審議会の際にも議論を重ねさせていただいた。

特に、今回は学ぶ主体である高校生の側に立って、これからの世の中を生きていく高校生たちの学びの形を決めるということである。皆様からいろいろな御意見を頂きながら、その形を整えていきたい。また、将来、未来に対する希望も併せて伝えていきたいと考えている。

〔副会長〕

会長とは 10 年前にも御一緒させていただいており、今回は会長の下で副会長を務めさせていただくため、よろしくお願いしたい。現在は、対話することや人と考えることが少なくなっている。10 年前はいろいろな現場に赴いて学生と触れ合ったことが私の財産になった。今回もそのようなことを体験しながら、この審議会を盛り上げていきたいと思う。

12 議事録署名人の決定

会長の指名により議事録署名人を決定した。

13 議 事

(1) 諮問

教育長から会長に諮問が手渡された。会長からは、十分な審議を行う旨の発言があった。

(2) 諮問趣旨等について

県立高校改革室長から諮問の趣旨と背景等の説明があった。続いて、教育総務課長から国の高校教育改革の動向について説明があった。

(3) 審議・質疑

〔議長〕

諮問に関わる背景や、現在の国の状況について御説明頂いたところである。ここを出発点として皆さんと議論を進めていきたいと考えているが、まず御説明のあったことについて、御質問やコメントがあればお願いしたい。

〔委員〕

ただいまの教育総務課長の説明に対する質問であるが、DX ハイスクール制度について現在は 3 年目であるが、国はいつまで続けていく予定でいるのか。

〔教育総務課長〕

国の予定であるため、明確なことは申し上げられないが、今回、N-E. X. T. ハイスクール構想を推進していく中で、DX ハイスクールをどうするのかという議論があったことは事実だと認識している。今後、全体としてどのような仕組みにしていくのかについては、N-E. X. T. ハイスクール構想の進展等々も踏まえつつ対応していくのではないかと考えている。

〔委員〕

今後、永続的に続くというような確信は今のところまだないということによいか。

〔教育総務課長〕

そのとおりである。

〔議長〕

現在、国の中で様々な分野の学びを深化させ、それに対応した人材が生まれてきてほしいという思いからこれらの事業がある。皆様それぞれの分野においても、人材上の課題や、「こういう能力も欲しい」というようなこともあると思う。

〔委員〕

保護者視点と地域視点という立場で、気になるところをお話しさせていただく。

学校再編により、新地高校が相馬総合高校に統合された。これまでは、新地高校に通っていた生徒が、学校帰りに保育所に寄って保育所の子どもを見てくれたり、小学校に寄って小学校の子どもたちを見てくれたりしていた。現在も、子ども食堂に相馬総合高校の生徒がボランティアとして来訪するなど、受け皿としての機能はあると感じているが、やはり高校があったときとないときとを比べると、少なくなったと思う。

市町村の教育長が回答したアンケートで「統合校の所在地と空き校舎のある地域では地域貢献度に差がある」とあるのも納得である。地域としても高校生たちの受け皿になる団体があれば、高校生が来てくれるとは思うため、活動を続けながら高校生たちが地域の人と関われる場をつくっていききたい。

また、私の家庭にも高校生がいるが、高校に行ったことで世界が広がったと感じている。高校は学びの場であり、コミュニティでもある。子どもの世界を広げる場と考えたときに、「福島っていいところだね」と思って大人になってほしいと思っている。大学進学などを契機に、福島から出ていっても、福島を良い場所だと思って戻ってきてほしい。そのために、小中学校も含めて福島の良さを伝えていく場であってほしい。

〔議長〕

非常に大事な御指摘であると思う。小中高と、だんだん関わる社会が大きくなり、その機会も増えると思う。プロジェクト解決等の社会との連携に関して今の状況はどうか。

〔委員〕

郡山駅前には10代後半を中心とする若者が自由に過ごせる居場所を設置している。そこに郡山駅付近の高校生が多く訪れており、中には広域通信制高校の生徒もいる。子どもたちはそこで地域活動を行っている大人や団体に出会い様々な経験をしている。また、ここに来る子どもたちは不登校経験のある子どもが非常に多い。このような居場所を通じて、様々な地域に出ていくという場面は日頃から目にしている。

〔議長〕

高校生も学びを通じて学校外に出ていくということは多いのではないだろうか。現在の学校の様子や、外部と連携したプロジェクトの状況について教えていただきたい。

〔委員〕

ここ数年、高校では探究学習が盛んに行われている。探究学習には、地域で課題を発見し、解決していくプロジェクトを立ち上げ実行していく地域課題解決型の学習や、自分で設定したテーマに基づき、大学の先生や研究所と連携する研究型の学習もある。また、自身の生き方や在り方を地域の大人と接する中で考えるという探究もある。このような地域の大人と連携して学びを深めていく機会は急激に広がっており、とても良いと思っている。

〔委員〕

私は、ふたば未来学園高校の1期生であり、富岡町出身で原発事故も経験し、今は震災の語り部等もしている。私自身は探究によって高校の学びが充実し、今の自分があると感じている。それは、「もう少しで社会に出る」ことを意識させられるものの、社会に出ることがどういうことか明確には分からないという高校生の時期に、何かを教える立場ではないフラットな関係として地域の方と接することができたという部分が大きい。加えて、いわゆるロールモデルとしての役割を果たしてもらったことも大きな経験である。そういう意味で、地域の方と関わる経験を高校生の時期にすることは必要である。

一方で、当時のふたば未来学園高校の生徒は、復興の担い手としての役割を求められていたと感じるが、全員がそう思えるわけではない。実際に、私の同級生の中にも、この地域で仕事をしたいと言っていたが、卒業するときには嫌になってしまったという極端な例もあった。地域に出る探究学習は、復興の担い手を育成する可能性は秘めているが、それを強く求めすぎることには気を付けるべきである。

〔議長〕

会津若松市においても、15歳で立志式のような制度があると聞いている。子どもを社会の一員として認めるような地元での見守り方について話を伺いたい。

〔委員〕

中学2年生の段階で立志式を行う学校は会津若松市内にいくつもあり、半分大人であるという自覚を持たせるということも目的の一つとしている。本市においては、地域総ぐるみで子どもを育てるという教育を重点としており、地域の皆様にどんどん学校に入っていた

だくことを推進している。例えば、家庭科の授業で魚をさばいたりミシンを使ったりする活動や、小学校低学年でタブレットを用いた授業などがある。地域学校協働本部事業もあり、全力でこのような取組をしている。

一方で、市議会の定例会において、小規模校においては積極的に統廃合を進めるべきだという意見も毎回いただく。しかし、地域から学校がなくなると、地域との連携してきた部分がなくなっていつてしまう。整合性をとりながら、地域と子どもの関わりについての説明をきちんとしつつ教育を進めている。

先ほどの教育総務課長の説明の中で「多様な学習ニーズに対応した教育機会の確保」について、「一定の生徒数の規模を確保した学びの提供が必要」とあった。高校教育に関して国の意向を確認したところである。

一方で、全国都市教育長協議会における情報交換によると、統廃合のトーンは今下がっていると言える。理由としては、不登校の増加に対して小規模校の価値が見直されていることが挙げられる。現在、小規模校で少人数に対して教育を行う方が重要になっているという意見が増加しており、数年前とは感覚が変わってきたような気がする。

〔議長〕

ニーズによっては小規模校の必要性もあるということを非常に興味深く聞かせていただいた。農業界では、継承者の問題等の課題もあると思うが、農業分野の観点から高校教育について意見をお願いしたい。

〔委員〕

県内に複数の農業高校があるが、正直に申し上げますと、卒業後に就農される方は極めて少ない。そもそも農家出身ではない農業高校の生徒が非常に多く、農業をすることを目指して農業高校に入学しているという印象は受けない。実際には、大学に行く生徒もいるが、農業高校の学科が幅広いこともあり、食品産業などの分野に就職する方が非常に多いと認識している。

専業農家として生計を立てることを考えた場合、経営者としての知識や経験も必要となる。高校教育の範囲内でそのような力を身に付けさせるのは厳しいと思う。農畜産物を作ってから、消費者に食べていただくところまでを俯瞰してみる力を持った人材育成が必要である。そうすると、ステージが違う教育体系が必要なのではないか。もし、本当に農業高校で農業の担い手を育てるということに特化するのであれば、現在のカリキュラムでは足りない印象である。

一方で、現場で先生が尽力していても、なかなか思うようにいっていないことも知っている。産業に関わらず、世の中で求められている基本スキルを育むということを念頭に高校教育を検討していただき、それを前提に我々が生徒を迎えて対応する仕方を考えるということもあると思う。

〔議長〕

基本的な学びの要素は全ての人に必要であると思っている。工業では工業高等専門学校があるが、農業ではいかがか。

〔委員〕

農業では高等専門学校はないが、福島農業短大はある。こちらは、農業、畜産を希望する方が多い。他は農業系の大学ということになる。福島大学にも食農学類ができてから長いが、就農者はほとんどいない。農業者をつくるということであれば、我々の組織や県の普及所が連携して、先人たちに学びをもらいながら農業経営者となるサポートをしている。学校外ではあるが、そのような育成プログラムを他県に先んじて福島県では行っている。

〔議長〕

商業についてはいかがか。

〔委員〕

私の会社では食品を扱っているため、第一次産業の方との連携は常に心掛けている。一方で、マーケットを考えると県内ではなく大都市になるため、大都市に出て行ってしまいうとなかなか戻って来ることができないという現状がある。食品を扱うという観点から、生産者とのつながりは大切にさせていただいているため、高校生が生産者との関わりを持つというような活動は進めていただきたい。

また、ドローン等についても生産者にとっては大切なツールになっているため学んでほしいと思いつつ、あまりに発展的になってしまう不安もある。農作物に関しては、雹などによる被害や輸入との兼ね合いもあるため、環境や国際問題についても学んでもらいたい。

〔議長〕

現在の高校生が約 1 万 4,000 人おり、大学に進学するのが 50%程度という話である。福島県内の大学には 2,000 人程度のキャパシティしかないため、多くの高校生が必然的に東京に出ていくことになる。小中高のうちに福島県の良さを発信していくことが重要である。報道関係からはどのように考えるか。

〔委員〕

一度県外に出ていった子どもたちが福島に戻って来てくれるような情報発信をしていきたいと考えている。そのためにも、福島を好きになり、また戻ってきたいと思えるような学びや活動を推進していただきたい。

〔議長〕

福島は非常に豊かであると感じるが、子どもたちにとってはその豊かさが分かりにくいとも思う。

〔委員〕

自分の経験を振り返ってみても、若者が首都圏に憧れを抱くことは不思議ではない。また、復興を担ってほしい、将来の福島を支えてほしいという期待が強すぎるのも、10 代の若者にとってはかわいそうであるとも感じる。

一方で、福島県の将来という大きな視点で考えたときには戻ってきてほしいというのが本心であり、一緒に福島県の未来を創っていきたいという期待もあり、そのバランスが大事であると思う。「大切にされた」という経験が将来そこに返していくような行動につながるように、「福島県が好きだ」と思うような体験を多くできるような学びの場があると良い。今後どんな状況にあっても、地域と接する実体験を大切にしてほしい。

〔議長〕

「実体験」や「本物感」のある学びについては、なかなか教科書には載っていない。教科書のような決められたツールでは地域のことは分からないと思う。

中学校から見た高校について伺いたい。

〔委員〕

義務教育の出口を預かる中学校としては、バランスの取れた人材育成を大事にしたいと考えており、総合的な学習の時間などにおいて、様々な大人に触れる、在り方・生き方を考えさせる教育に力を入れている。

一方で、地域課題の解決に目を向けた探究的な学びにも取り組ませており、このようなバランスを大事にしていきたい。中学生なりに得た「自分にもやれることがある」「社会とつながっている」という実感を高校でも深めてほしい。

〔議長〕

大学においては、研究のほかに初年次教育にも力を入れている。初年次教育で多くの大学が「経験を積ませること」に力を入れており、知恵になるような形の知識が重要である。

青年会議所の立場からも意見を伺いたい。

〔委員〕

私が青年会議所に入ったのは、高校2年生時に地元の猪苗代町で青年会議所が主体になって行われたイベントへの参加がきっかけである。もともと地元は嫌いであったが、地元を良くしようとする大人たちとの関わりの中で考えが変わった。

また、学びたい科目が学べる環境の整備は重要であると考えている。高校生が夢を持てるような環境をつくっていくことが大事である。

〔議長〕

得意なことや好きなことにチャレンジする機会が多いと、その地域は楽しくなると思う。商工会の立場からも意見を伺いたい。

〔委員〕

水産科出身の高校生がバスのドライバーを志望して入社したケースがある。この生徒は遠足で乗ったバスのドライバーに声を掛けられたことがきっかけであった。

ふたば未来学園高校の生徒は、どのくらいの割合で地域と関わっているのか。

〔委員〕

1 期生の時は、6、7 割が双葉郡出身であり、地元出身者も多く探究にも熱心であった。現在も全員探究活動は行っているが、地元出身者の割合が少なくなっているため、地域に関わるプロジェクトをしているのは全体の 3、4 割という印象である。地元出身でないと地域探究に関して情報が不足していたり、きっかけがなかったりするのではないかな。

〔議長〕

白河市についてはいかがかな。

〔委員〕

地域の産業を始め、守りたいものがあるのは承知しているが、保護者としては、子どもたちのやりたいことを応援したいという気持ちが一番強い。教育も大事だが、地域の大人が地域を盛り上げていくことの方が重要だと思う。

〔議長〕

親としての気持ちもよく分かる。一方で、企業と人材のマッチングが求められている。親として、地域として、伝えるべきところは伝え、生徒の学びの要素としてもらいたい。

〔委員〕

時代とともに地域の教育力が低下し、コロナ禍を経て関係が希薄になっている。そのため、本校では生徒が自主的に参加するボランティア活動や、地域の祭りへの部活動派遣を意図的に実施し、地域とのつながりを維持・強化している。

10 年前の学校教育審議会の答申では、高校のクラス数を 4 から 6 とする取り決めがなされた。しかし、少子化が進んだ現在、当時の基準を維持することは困難である。過去の決定に固執せず、現状に合わせて臨機応変かつ柔軟に制度を見直すべきである。

学校改革には多大なエネルギーが必要であり、きっかけとして DX 化の推進が極めて重要である。国や県の予算を積極的に活用し、学校全体を変革していく必要がある。予算の裏付けがなければ、学校の変化は望めない。

また、日本の高校は、教員が一方的に知識を伝授する明治時代以来のスタイルから脱却できておらず、世界の潮流である個別最適な学びやファシリテーション型の授業に遅れをとっている。高校が変わらない最大の要因は大学入試にある。一般入試を廃止して総合型選抜へ移行するような抜本的な入試改革を行うことで、現場はドラスティックに変化し、激変する社会を生き抜く力を子どもたちに身に付けさせることが可能となる。

〔議長〕

大学側も総合型選抜の導入など改革を進めており、今回の諮問もそうした流れを踏まえたものである。世界のトレンドを見据えた上で最も重要なのは、若い世代が「自分で考え、その考えに責任を持って挑戦できる」ように育つことである。この審議会での議論が、そうした人材を育成するための制度設計や仕組みづくりに一歩でも早くつながることを期待している。

〔委員〕

もはや DX ではなく AI による変革、AX の時代である。将来的には事務職や文系人材が過剰となる一方、理系人材や工業高校卒などの現場人材が大幅に不足すると予測されている。AI に仕事が奪われる時代を見据え、従来の普通科文系や商業高校といった学科編成及び普通科の在り方を今のままで維持してよいのか、抜本的な議論が必要である。

資料にある「学習ニーズの多様化」の背景には、全員が一律一斉に受ける授業カリキュラムから脱却できていない本県の厳しい実情がある。現在の学級内には、不登校傾向にある生徒、学習困難を抱える生徒、外国籍の生徒、特異な才能を持つ生徒など、非常に多様な子どもたちが在籍している。この現状を踏まえ、一律一斉教育からの脱却へ向けて、より踏み込んだ提示をすべきである。

また、資料に示された「生徒の学びの充実のための多様なニーズにこたえる環境」という柱には、特別支援教育の視点が欠落している。小中学校に比べて高等学校の特別支援教育体制は著しく遅れており、この課題に対して踏み込んだ対策を講じるべきである。

〔委員〕

地域活動における学びにはアクティブなイメージが先行しがちだが、今後は生徒が地域にケアされるという視点も非常に重要になる。多様なニーズに応える環境づくりにおいて、公立高校は教育ニーズだけでなく福祉やケアのニーズについても真剣に考えていくべきである。

子どもの数が減少する一方で、多くの生徒が公立高校ではなく県外の広域通信制高校を選択している現状がある。生徒たちがなぜ公立高校を選ばないのかを考えたとき、そこにはケアの視点の欠如や不登校といった課題が背景にあると推測される。多くの委員からも「不登校」という言葉が出ていたとおり、今後はこのケアの視点や不登校対策について、踏み込んだ議題として議論していく必要がある。

〔議長〕

各委員から多様な意見が出されたことにより、全体の理解が深まった。今回は限られた時間のためここで議論を終了とするが、本日出された意見も含めて次回以降の会議で更に議論を重ねていきたい。

今後の予定について、事務局より説明をお願いしたい。

(4) 今後の予定について

教育総務課長より、資料 2 ③により説明があった。

14 閉 会